

講演録

アラビア語情報の送り手として受け手として

～日本の国際放送アラビア語サービス 80 年に寄せて～

坂上 裕規

(前株式会社日本国際放送メディア事業部部長)

本稿は 2022 年 2 月 26 日に東京学士会館にて開催された大阪大学外国語学部（旧大阪外国語大学）同窓会「咲耶会」の 2 月定例講演会で発表されたものである。

【はじめに】

2021 年は、1991 年の湾岸戦争から 30 年、2001 年の同時多発テロとその後のアフガニスタン空爆から 20 年、2011 年に相次いだアラブ諸国での政変劇（私は「アラブの春」という言葉は使いません。誰にとっての「春」なのかは立場が異なれば感じ方も異なるからです）から 10 年と、アラブ中東世界に関係する大事件から「〇年」という節目が相次ぐ年でした。私はこれまでの人生の半分以上をアラビア語に接しながら過ごしてきました。その時間のうち 30 年以上が国際放送のフィールドでの経験です。NHK が実施している国際放送「ラジオ・ジャパン」のアラビア語放送担当ディレクターとして、1984 年から日本からの情報発信に携わりました。

同時に、私は海外からのアラビア語ラジオ放送、アラビア語メディアの受信分析にもかかわってきました。

実はほとんど知られていないことですが、去年（2021 年）は日本の国際放送のアラビア語による情報発信も 80 年という節目にあたっていました。9 月にその関連で講演を行う予定でしたが、折しもアフガニスタン情勢が風雲急を告げたため、急遽演題を変更しましたので、今回の講演は 81 年を迎えたアラビア語情報発信を機に…ということになってしまいました。とはいえ、これまでのあゆみを振り返り、これからの日本発中東アラブ世界向けの発信はどうあるべきかを考えることは意義深いことだと思います。

戦前から戦中、戦後の国際放送の全体のあゆみを記した書籍や資料はいくつかあるのですが、アラビア語放送に限ると体系的にまとめられた資料はありません。そこでこのタイミングで、日本の国際放送のアラビア語による情報発信のあゆみを振り返ってみようと考え、資料集めと、まとめに取り組んできました。

きょうこうして皆様にお話をする機会をいただいたわけですが、諸先輩方、後輩のみなさんはアラビア語の専門というわけでもない方も多いわけですね。ですので、この場ではアラビア語放送 80 年史そのものに焦点をあててお話するのではなく、アラビア語放送 80 年という節目をきっかけとして、国際放送によるアラビア語発信に携わった経験、そして海外からのアラビア語放送を受信し分析してきた経験の両面から見えてきたものについて、お話をしたいと思います。

また、本筋の話ばかりでは退屈になってしまうかもしれませんので、国際放送にかかわる面白いトピックを時々挟みながら話を進めていきたいと考えております。

【国際放送黎明期】

日本の国際放送は1935年（昭和10年）6月1日に始まりました。戦前・戦中は「海外放送」と呼ばれていました。日本語と英語を使ってハワイ・北米地域向けに一日1時間の送信がスタートしました。当初は「東京からのラジオ放送」という名称でサービスを行いましたが、その後「ラジオトウキョウ」という名前がつけられました。

1940年代に入ると国際情勢は徐々に緊迫の度を高めていきます。各国は、海外放送にプロパガンダの主たる手段として着目し、規模を拡充していきました。

短波放送を使って自国の主張を世界に強力に発信するイギリスやアメリカ、ソ連など列強に対して、日本も海外放送の拡充で対抗しました。放送時間は拡充され、使用する言語が増えていきました。

「ラジオトウキョウ」の使用言語にアラビア語が加わったのは、1941年1月1日のことでした。国際情勢を踏まえ、海外放送の拡充が打ち出される中でのアラビア語放送のスタートでした。戦況が悪化する前までは「ラジオトウキョウ」はピーク時には24言語でサービスを実施するまでに拡充されていきました。

アラビア語放送の数少ない記録を紐解いていくと、当時の日本も中東地域の戦略的重要性に着目しており、番組の内容からはイギリスやソ連の影響力に対抗してこの地域への情報発信を重視していたことがわかります。

アラビア語放送は毎日30分、現地時間の夕方、つまり日本時間では深夜時間帯に放送を行っていました。後に放送回数が一日2回に強化されます。

当時の番組表によりますと、放送の内容は アラビア語通信、講演、演芸、音楽、実況等 など となっています。通信 というのはいわゆるニュースを指しているのですが、資料によりますと、こんな編集方針に基づいていたことがわかります：

「時に『時事問題の解説』であり、『文化、経済、社会その他、各方面に関する紹介』であり或時は『主張』であり、さらに又『啓蒙』であり場合によつては、不
當なる外國のデマ宣傳に對する果敢にして性格を誇る『反駁』でもあり、對外宣傳
に於ける最も有力なる武器として力を入れてゐる」

また、講演 はいわゆるニュース解説で、その内容は例えば1942年6月の記録によると：

日ソ通称協定成立の意義
躍進日本に漲る「日本的性格」の自覺
シリアに於ける英佛の交戦
参戦に驀進するアメリカ
大東亜共榮圏とは何か（アラビア語）
満蒙國境確定の意義

世界に見えざる特異性「中央協力會議」

…（以下略）」

などのタイトルで放送されていたとされています。

当時のアラビア語放送にアラブ諸国から来日しているネイティブが何人いたのかなど、人員構成、体制にかかわる資料もまだ見つけられていません。ただ、アラブ諸国だけでなく、ケニアやインド出身でアラビア語を使える外国人が放送に携わっていたという話をきいたことがあります。

一方、日本人スタッフとしてアラビア語放送を支えていたキーマンの一人が大日本回教協会理事を務めていた菊池慧一郎（1884-1949）氏でした。菊池は大日本回教協会の活動において中心的な役割を果たした人物として知られています。また、アラビア語のみならずラテン語をはじめ多くの言語に精通し、さまざまな著書を執筆、翻訳して残した人物です。おそらく日本語で書かれるさまざまな原稿をアラビア語に翻訳したり、あるいはネイティブが翻訳した原稿をチェックしたりしていたものと想像されます。

哲学者で、のちに名古屋大学教授をつとめた古在由重（1901-1990）氏は、44年2月から大日本回教協会の嘱託として勤務。アラビア語放送のみならず、ラジオトウキョウの全ての言語で放送するための解説原稿などの執筆を行ったとの記録が残っています。古在による「戦中日記」（1967年）にはいくつかの具体的な記述が出てきます。古在はマルクス主義者として33年と38年に当局に検挙されるも43年に執行猶予となり、44年に日本回教協会の嘱託となりました。地域の専門性を備えているにせよ、上記のような解説記事は自らの考えとは必ずしも一致しているわけではなく、時に難渋しながらの原稿執筆だったようです。

ただ、アラビア語放送の内容について、当時の放送台本、その他資料は終戦と同時にほとんどが焼却処分となったため、これ以上の詳しい情報が残っていないのが大変残念です。

【有名人がかかわる海外放送】

戦前戦中の海外放送には、多くの有名人がかかりました。

音楽の分野では…

・山田耕筰

海外放送の開始シグナルの作曲、テーマ音楽の作曲、そのほかさまざまな場面でスタジオ生演奏などを実施しました。1941年（昭和16年）、情報局管轄下の「日本音楽文化協会」が発足し、副会長に就任、また音楽挺身隊を結成してしばしば占領地での音楽指導にも携わりました。1948年に脳溢血で倒れる。1965年没。

・藤山一郎

戦前・戦中の国内放送、海外放送で、積極的にラジオ放送に出演し、歌声を披露しました。藤山一郎氏については、みなさんよくご存じだと思いますので、詳細な経歴はここでは割愛します。

当時の海外放送は、いわば国を挙げて力を入れていたメディアでしたから、音楽分野以外にも当時の有名人や著名人が多く出演していたことは想像に難くありません。

【海外放送は日本の JAZZ の聖地】（アラビア語放送からは少し外れて閑話休題）

1930年代、ジャズの隆盛に歩調を合わせるかのように、ジャズ、ブルースなどの要素を取り入れた和製洋楽が花開き、「ダイナ」「別れのブルース」など多くのヒットが生まれました。一方で満州事変（31年）、日中戦争（37年）、太平洋戦争（41年）と戦火の拡大に伴い、音楽も統制の対象となっていました。

戦火が拡大する中 1940年10月に都内の全ダンスホールが閉鎖されたのを皮切りに、全国でダンスホールの閉鎖が相次ぎました。ジャズの演奏家たちにとって、ダンスホールは演奏ができる大事なステージでした。その仕事が失われたことは日本のジャズ界にとっておきな痛手でした。

ジャズミュージシャンたちの活躍の場が次々となくなる中、例外的にジャズの演奏が許されていたところが、「ラジオトウキョウ」の愛宕山スタジオでした。そこには日本を代表するジャズメンたちが集まり、質の高い演奏を披露していました。歌手の森山良子さんのお父さんでトランペット奏者の森山久さん、元スパイダースのかまやつひろしさんのお父さんでギター奏者のティープ釜菴さんなども、愛宕山で演奏していたジャズミュージシャンでした。

東京から放送されるジャズの質の高さは、南洋に展開する米兵たちにも好評でした。当時の日本政府はラジオトウキョウをプロパガンダの手段として位置づけ、音楽とともに日本の主張を米兵たちに浸透させようとしていたわけですが、皮肉なことに米兵たちに届いていたのはプロパガンダではなく、音楽だけだったようです。

米兵の間に日本のジャズが人気だったことを裏付けるエピソードが一つあります。太平洋戦争末期、戦局が日本に圧倒的に不利になり、東京が毎日空襲にさらされるようになった1945年の初夏のことだったといえます。一機のB29爆撃機が愛宕山スタジオ上空を低空で飛行して、爆弾ではなく布袋を落としていきました。布袋の中身はジャズを収めたSPレコード。南洋でラジオトウキョウの放送を愉しんでいた米兵たちからの贈り物でした。彼らはラジオトウキョウが放送する質の高いジャズに敬意を払い、爆弾ではなくSPレコードを落としていったというわけです。

そのレコードはどうなったか… おそらくおわかりかと思いますが、当時のSPレコードというのはエボナイト製ですから落としてしまうと簡単に割れてしまいます。B29が落としていったSPレコードも残念ながら一枚残らず割れてしまっていたといえます。こうした知られざるエピソードを生み出すほど、ラジオトウキョウのスタジオにはすばらしいジャズ演奏家たちが集っていました。つまり、海外放送が日本のジャズの伝統を守ったというわけです。

【終戦・そして戦後の国際放送へ】

さて、話をアラビア語の放送に戻します。

国際放送は1945年の終戦で一旦休止され、戦後1952年に再開されます。名称は「ラジオトウキョウ」から「ラジオ・ジャパン」に改められました。

戦後制定された放送法には国際放送について次のような記述があります。

「協会は、外国人向け国際放送若しくは外国人向け協会国際衛星放送の放送番組の編集及び放送又は外国放送事業者に提供する外国人向けの放送番組の編集に当たっては、我が国の文化、産業その他の事情を紹介して我が国に対する正しい認識を培い、及び普及すること等によって国際親善の増進及び外国との経済交流の発展に資するようにならなければならない。」（放送法81条5）

こうした方針に基づきアラビア語も1954年5月に再開されました。

戦後のアラビア語放送は、新しい放送法が謳う理念をもとに中東地域での日本理解促進と友好を主目的としてきました。

【国際放送は民間外交の重要な手段】

国際放送が果たす役割は決して派手なものではなく、地道な取り組みです。

このような取り組みの一例としては、アラビア語放送の長寿番組の一つ、日本語講座「やさしい日本語」があります。アラビア語放送ではこの番組を1964年度から放送し、数年ごとに内容を変えながらこんにちまで継続されています。

この講座をきっかけに日本に興味を抱き、日本語を本格的に学び、日本に留学したリスナーもいます。国情が不安定なシリアやイラクで、番組をきいて日本語を学び、いつかは日本に行きたいと夢を膨らませている子どもたち、そして放送を教材として使っている学校の先生もいます。そうした人々が日本との懸け橋になってくれています。

写真の一番左は、トルキスタニ元駐日サウジアラビア大使です。この方もアラビア語放送の「やさしい日本語」を聴いて日本語を学んだそうです。真ん中は、西アフリカのカメルーンの地方都市で、フランス語放送の「やさしい日本語」で日本語を学んだハッサン君という青年です。彼は夢をかなえて来日することができました。その後カメルーンに戻って日本語教室を開いているとのこと。右側の写真はケニアの女学校の生徒たち。彼女たちもスワヒリ語による「やさしい日本語」を日本語学習教材として活用しているといえます。

さて、またアラビア語放送に話を戻します。

いま、「ラジオ・ジャパン」のアラビア語放送はインターネットのおかげで中東以外の、たとえば欧米やオーストラリアなどに点在するアラビア語コミュニティにも情報を届けることができ、また幅広い年代性別に聴取者層が広がっています。また、イラクとパレスチナ（ヨルダン川西岸地区）では現地のFMラジオ局経由で放送を届けています。テロ組織ISイスラミックステートによって2014年6月9日以来支配されていたイラク北部のモスルが2017年7月10日に解放されたとき、「ラジオ・ジャパン」のアラビア語放送の中継がすぐ

さま再開され、IS 支配下での長年の苦しみから解放された人びとからは日本からのメッセージに感謝のコメントが寄せられました。

こうした事象はまさに国際放送が果たす民間外交（パブリックディプロマシー）の役割を象徴しています。息の長い取り組みですが、アラビア語放送に携わってきた者にとって、このような聴取者からの反響を得られるというのは喜びであり誇りとするところです。そして、COVID-19 の感染拡大が依然として続くとともに、世界の分断と対立がより深く大きくなりつつある世界にあって、このような取り組みが果たす役割はますます重要なものとなっていると感じます。

【アラビア語による情報の受け手として】

一方、私はアラブ世界からのテレビ、ラジオやネット情報など、「受け手」としてもアラビア語メディア、特に「放送」に接してきました。

中東地域からのアラビア語による情報を様々な手段で受信し、それらを分析することでメディアが伝えない現地状況が見えてくることもあります。

もっとも忘れられない経験は 1990 年 8 月の湾岸危機勃発時から 91 年 1 月の湾岸戦争の期間でした。バグダッド、クウェートからの放送を日本で傍受し、現地の緊迫した状況を知ることができました。8 月 2 日にイラク軍がクウェートに侵攻したというニュースが飛び込んできたときから、短波放送のモニタリングを始めました。メディアが報じるニュースでは、クウェートがイラクに占領されたことだけが伝えられましたが、クウェートからの短波放送は、実は侵攻が始まって一日半あまり経った 8 月 3 日の現地時間 14 時まで世界に抵抗のメッセージを伝え続けていたことは知られていません。後にわかったことですが、クウェート放送のスタッフたちはイラク軍が侵攻する中で隣国サウジアラビアに逃げましたが、クウェート市内の隠しスタジオと回線をつないで番組を放送できる体制を急ごしらえし、そのからくりをイラク軍が発見するまでの間はクウェートの短波送信所から抵抗のメッセージを放送することができたというのです。各国の放送のニュースでは伝えられない現地でのやりとりを直接耳にすることで、あの日のできごとをより多角的に分析することができました。

91 年 1 月の湾岸戦争開戦の際には、イラクのテレビ放送に先立ってラジオが流したフセイン大統領の肉声を受信することにも成功しました。当時バグダッドには米国の ABC や CNN など、限られたメディアが特派員を置いているだけだったと言われています。フセインの肉声は当初はイラク国営ラジオで流されたため、イラク国営テレビに注目していた、米国をはじめとする各国のメディアはその肉声をキャッチすることができませんでした。遠く日本にいても、目的の情報を得ることができるメディアが何かを考え、その中から他のメディアが着目しているものとは異なるチャンネルで情報を収集することの重要性を痛感したできごとでした。

2011 年にアラブ世界で政変が相次いだときには、リビアの動きをラジオでモニタリング

しました。中東の衛星テレビ局「アル・ジャジーラ」をはじめとするメディアが連日報じる情報を横目に、私はリビア政府側のテレビ・ラジオ放送についてもモニタリングをしました。リビア政府側の放送が流すメッセージはカダフィ政権による官製情報でありあまり意味がない、と見る向きもありましたが、私としては政府側のテレビやラジオがいつ「寝返り」をみせるか、それによって国内の状況がどうなっているかを知ることができるのではないかと注目しました。

2011年リビア時間の2月21日22時、リビアの国内主要都市にあるラジオ局がどのようなメッセージを放送しているのかをチェックしていると、東部の主要都市アル・ベイダとベンガジのラジオ局が反政府側のメッセージを流し始め「自由リビアの声」などと名乗り始めました。エジプト在住の知人からの一報を受けて聞いてみると、それまで首都トリポリからの番組を流していた放送の雰囲気が一変し、放送には不慣れな反政府側の指導者や治安担当者たちがマイクの前に代わるがわる座り、次々に声明を読み上げたり呼びかけを行ったりするなど、緊迫感と高揚感にあふれていました。明らかに急ごしらえとわかる「自由リビアの声」は、何とか放送の体を保っているといった感じでした。

こうしてラジオは現地で起きている戦況の変化を伝えてくれました。その後、戦況は一進一退を繰り返しながらドミノが裏返っていくように現地ラジオ局の放送内容が変化し、8月30日に首都トリポリからの放送が反政府側のメッセージを流すようになるまでのさまは、臨場感にあふれるものでした。

【送り手と受け手という両方の立場から見えてくるものは？】

アラビア語による情報の送り手と受け手という両方の経験から見えてくるものは何でしょうか？

いま、巷にあふれる情報の信ぴょう性の担保がデジタル時代に難しさを増していることを痛感しています。国際情報発信の世界でかつて放送（短波放送など）が軸になっていた時代は、電波を出すことができる主体が国や大規模な団体（政治団体だったり宗教団体だったり）に限られており、送り手の正体がわかっていることである意味情報の信ぴょう性が担保されたり、逆に疑念を持つことができたりしました。

しかしデジタル時代に入り、個人レベルが情報の送り手となることができるようになり、状況は一変しています。ネット上にあふれる情報はまさに玉石混交であり、個人が発信する情報と大手メディア、国などが発信する情報が時として同じレベルに見えることも少なくありません。ホームページがきれいに整備されていたり、文章が洗練されていたりすれば、情報の受け手はそれらがどこから発信されているかを気にかけなくなりがちです。中には悪意に満ちた情報が意図的に流されていることも少なくありません。そうした中でなにが正しい情報かを受け手側が理解することも難しくなっていると感じます。様々な情報を総合して分析するような受け手側の情報リテラシーの向上が求められていると感じます。私自身も複数のメディアをモニタリングすることで、一つの事象により立体的にアプローチ

することを心がけています。

身近な例として強く感じているのは、たとえばアラブ諸国から発信されているテレビやラジオの情報のうち、どれが信頼できるかがわからないという問題です。信頼という言葉が適切でなければ、どのメディアが「時の政府による公式な見解」を発信しているかということです。インターネット上で、たとえばリビアの放送を検索すると数十のテレビ、ラジオチャンネルがひっかかってきます。画面にお示ししている表は、リビアのテレビ局のリストですが、かつては国営テレビだけだったリビアのテレビ放送は、いまや民間局も含めると数十局あります。名前が似たチャンネルも多い。かつて電波媒体が情報発信の主力だった時代は、リビアといえば国営メディアしかなく、情報を収集するチャンネルは簡単に狙いをつけることができました。しかし、デジタル時代のいまは、チャンネルの名前を見ただけでは情報の送り手の主義主張、背景がすぐにはわからないのです。

これはつまり、国や大手メディアが発信する情報も、ネット上にあふれる膨大な量の情報の中に埋没してしまいかねないということを意味します。アラビア語に限らずすべての言語による発信に共通することですし、情報の送り手としてもよく検討すべきポイントだと思います。

ただ、アラブ中東世界においては、自国の政府による官製情報やその他の国内メディアが流す情報には多くの人びとが信頼をおけないと感じていて、隣町で起きている事件などを英国のBBCなど外国のメディアで知るなどという習慣が日常になっています。こうした「外からの情報に頼る」状況にあるアラブ中東世界ですが、欧米のメディアに対する抵抗感がまったくないわけではありません。そこに「自国でもない、欧米でもない」日本からの情報、つまり第三極からの情報が受け入れられる下地があります。

デジタル時代において、アラビア語を含む日本の多言語による国際放送には、いかに他の情報と差別化をはかれるか、受け手側にとって魅力的な情報を発信できるか、そしてどうやってこちら側の考え方や主張を送り込んでいくかなど、質量の充実を軸にハード、ソフト両面にわたる戦略的アプローチが一層重要になっています。###